

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

SER no.149; Concluding Remarks

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-07-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岸上, 伸啓 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00009437

おわりに

本書は、これまで日本人研究者がほとんど取り上げてこなかったアイスランド、ノルウェー、デンマーク領フェロー諸島とグリーンランドにおける捕鯨、日本の沿岸小型捕鯨、EUの捕鯨政策やベトナムの鯨信仰などに関する論考を所収している。国内外で捕鯨文化の研究があまり行なわれていないという現況を考えると、本書の出版は捕鯨（文化）研究の大きな前進を意味すると考える。

本書を通読すれば、日本の小型沿岸捕鯨やイルカ漁を含め世界各地の現在の捕鯨は、国際的・国内的な法規制や反捕鯨運動の諸影響などさまざまな制約のもとで実施されており、その将来は明るいとはいえないことがわかる。その一方で、これまで捕鯨に携わってきた多くの先住民は現在でも捕鯨を続けようと努力している。彼らにとって捕鯨とそれに関連する諸活動は、アイデンティティや生き方を維持する上で、きわめて重要なものであるからである。

世界の趨勢から見ると人類にとってクジラは利用すべき資源から守るべき野生動物へと変化してきたといえるだろう。1970年代以降、欧米諸国をはじめ多くの各国政府や国際的な環境保護・動物保護団体が反捕鯨運動を展開し、かつ世界各地の若者層の鯨食離れが進行し、ホエール・ウォッチングのようなクジラの非致命的利用が盛んになるにつれて、世界各地で捕鯨を行うことが難しくなり、かつての捕鯨文化は衰退を余儀なくされている。このような状況であるからこそ、クジラは食料であるかどうか、捕鯨の意義や是非、クジラとの付き合い方について真剣に考える必要がある。そのためには世界各地の捕鯨や捕鯨文化の歴史と現状をより深く知ることが不可欠であると考えられる。

執筆者一同は、今後も捕鯨や捕鯨文化の研究を行い、捕鯨問題や人類とクジラの関係について調査を継続し、考えていくつもりである。そしてこの探究は、極端な主張が行きかう捕鯨問題の解決に貢献するのみならず、異なる価値観や歴史を持つ人びとが相互に理解しあいながら、共生するための課題を考える糸口も提供することになると思う。本書の研究成果を踏まえて、人類とクジラとの関係に関して今後の課題を整理しておきたい。

第1に、世界各地の捕鯨や捕鯨文化について詳細な民族誌的研究を進めるとともに、環境保護・動物保護団体などによる反捕鯨運動の捕鯨や捕鯨文化に及ぼす諸影響の研究を推進する必要がある。その際、人類とクジラ、モノ、気象、他の生物などの諸アクターとの複合的な関係に注意を払い、より広い視野から捕鯨文化や捕鯨を理解し、分析を行う必要がある。

第2に、クジラの利用やクジラとの関係について時代的な変化を考えると、ホエール・ウォッチングやクジラの展示・ショーなどのクジラの非致命的な利用も新たな文化とし

て捉えることができる。これらに関する人類学的研究を行うべきであろう。

第3に、人類とクジラの関係を動物福祉や動物倫理、環境倫理との関連から検討することにより、人類と野生動物との関係のあり方の歴史と将来を考察することが必要である。

本書は、国立民族学博物館を拠点として平成27（2015）年度から平成30（2018）年度までの4年間に実施してきた科学研究費補助金・基盤研究（A）（海外学術）「グローバル化時代の捕鯨文化に関する人類学的研究—伝統継承と反捕鯨運動の相克」（課題番号JP15H02617）の研究成果の一部である。研究代表者として本研究を可能にした日本学術振興会および国立民族学博物館に感謝の微意を表したい。

岸上伸啓

平成31年3月、東京にて